

デンマーク視察記(3)

一般社団法人産学協働人材育成コンソーシアム プログラムコーディネーター
北海道武蔵女子大学 経営学部経営学科 准教授
公認心理師・臨床心理士

宮本 知加子



皆さんは、デンマークの若者に対して、何かしらのイメージをお持ちだろうか。あるいは、国際競争力No.1の国であると聞くと、若者へどのような教育を行っていると思像されるだろうか。

筆者は、一般社団法人産学協働人材育成コンソーシアム(CIAC)が主催したデンマーク・コペンハーゲンでのスタディーツアーに参加し、デンマークの生産性の高さの秘訣、それを支えているであろう教育観・教育方法を探るため、実際に企業・高校・大学などを視察してきた。本稿では、デンマーク視察記(1)(2)(本誌No.594、595)に続き、若者が集まる「Ungdommens Folkemøde(若者のためのデモクラシーフェスティバル)」という年に一回のイベントとデンマーク市内にある高校への訪問を報告する。

この二つの視察を通して見えてきたデンマークの高校生への教育と大人たちの若者との関わり方について述べる。重要なキーワードは、「デモクラシー(Democracy)」と「トラスト(Trust)」である。

Ungdommens Folkemøde: 若者のためのデモクラシーフェスティバル

このイベントは、若者のための、社会、デモクラシーに焦点を当てた青少年の教育を目的とした、職業や社会参加への好奇心を刺激する参加型のイベントとなっている。オープンで誰でも参加でき、事前登録の必要もない。広い芝生の公園に多くのテントが立ち並び、毎年、三万人の若者が集い、対話と実践の場となっている。広大な公園内は、広々としているため、多くの人が行き交っていても混雑しているという感じはなく、余裕を感じられる空間である。エリアごとに、様々なテーマや職業が用意されており、それを散歩しながら探っていく。

このイベントは、今年で九年目を迎える。主催者によると若者たちが集う場が少ないことから、若者向けに開催されるようになった。近隣の高校の先生が案内し連れてきてくれるケースが多く、高校生くらいの年代が参加し



イベント会場

ている。先生たちは、先生用のブースで休憩していたり、周りの先生と談笑している。各ブースは、その分野について興味を持てるように様々な工夫やゲーム感覚で体験できるようにになっている。環境やエネルギーといった社会課題もあれば、実際に料理をする、大工仕事をやる、といった実技を伴うスペース、性に関するテーマまで多岐にわたる。筆者は、当初、すべてのブースで所謂議論が行われているのか

と思っていた。議論というからには、それらは口頭で熱弁を奮っているイメージであった。しかし、そのイメージとは随分とかけ離れていた。話を聞いたり、質問をするといった口頭のやり取りもあるものの、何か(手を動かしたり、資料や教材)を通してやり取りをするものが多い。

一つの特徴的なブースとなっていたのが、参加者の誰もが自分の話したいテーマについて、二分間のスピーチができるブースである。そのステージは、ビール箱を模しており、観客席の椅子もビール箱のデザインである。これは、以前労働者がビール箱に乗って自らの主張をしたことに由来しており、その文化が受け継がれている。話を聞きたい人がいれば、そのステージの周りにわらわらと集まって、話が終わると、そのスピーチをしてくれた若者に惜しみのない拍手を送る。自分の主張が他者に受け入れられ、また一つの主張が認められる瞬間を共有している気持ちになる。さて、参加している生徒たちを観察して

ると、熱心に取り組んでいる生徒もいる一方で、何となく友達と一緒に歩き回っている生徒、海を見ながら海岸で佇んでいる生徒、友達と楽しそうに話し遊んでいるように見える生徒、実に様々であった。すべての生徒が関心のあるブースに迷いなく参加しているかという点、きつとそうではなく、どこを回ったらよいかわからない生徒もいれば、シャイでブースの中に入りたくなさそうな生徒、照れくさそうにやり取りをしている生徒もいる。どの国のティーンエイジャーもやはり同じであるといった安心感すら覚えるような光景であった。

とても特徴的だったのは、行動の自由度が高く、強制されているような感覚がないことである。受付もなく順番などもないために、自由にやり取りをしている印象があり、そのイベント内での行動は、生徒たちの主体性に任せているように見えた。どこにどのように「居る」ことも許容されており、一人ひとりの行動が尊重されていると感じられた。大人の側の見守る大らかさを感じられ、高校生に対するトラスト(Trust)が体現されている。

デンマークの教育制度とギャッププレイヤー

デンマークの義務教育は、日本という小・中学校にあたり九年間である。ただし、その後の進路において、受験制度がなく、教育費は無料であることが日本との大きな違いであろう。デンマークの中学生は、「中学を卒

業したらどこの高校を受験するのか?」ではなく、「自分がどのような職業に就くのか?」を考へて進路を選ぶことになる。もし、高等教育(大学)に進まないと資格が取れない職業に就きたいのであれば、高校に行く必要が出てくるため、高校進学を選ぶ。一方で、将来やってみたい仕事や、大工・美容師・調理師といった技術を必要とするものであれば、職業専門学校を選択する。

また、ギャッププレイヤーが推奨されている。ギャッププレイヤーとは、修学前に一年間ほどの「空白時間」を持つことである。日本という浪人とは違い、見聞を広げるための時間と捉えられている。義務教育では学習が足りなかったと感じる場合、高校入学前にギャッププレイヤーを取ることもできるため、同じ学年の生徒たちと一〜二年の年齢差がある。大学入学後にギャッププレイヤーを取って、自分の経験したことをアピールして就職する学生もいる。個人の能力や発達に差があるのは当然のことであるが、それをそのまま社会が受け入れて、社会に出る前の時間をその個人に合わせたタイミングで学習できる仕組みになっている。

高校における教育

コペンハーゲン中央駅からほど近い、高校へ訪問した。迎えてくれたのは、教務のリーダーと、この高校を卒業したばかりのアンドレア(十九歳)である。リーダーは、アンドレアのことを、「アシスタント」ではなく、メンバーとしてトラスト(信頼)し、指示されたことをするのはなく自分で考えて動いてくれるメンバーだと紹介してくれた。



宮本 知加子 (みやもと・ちかこ)

九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻博士後期課程修了。博士(心理学)。公認心理師、臨床心理士。専門は、産業・組織心理学、臨床心理学。スクールカウンセラーや発達教育センターでの相談員の経験をもつ。前任校ではキャリア教育やインターンシップを担当。二〇二三年に北海道武蔵女子短期大学に着任、二〇二四年北海道武蔵女子大学開学に伴い現職。

デンマークの高校では、十五歳から十九

二十歳の生徒（ギャップイヤーがあるため）が三年間学んでいる。GPAでトップ3に入るこの高校は、一〇〇名から一二〇〇名の生徒が在籍し、国際交流に非常に力を入れている。この高校の生徒・教員・保護者が共有しているバリュー（価値観）を教えてください。それが次の四つである。デンマーク語の頭文字をとってNORAと呼んでいる。その四つとは、① Nysgerrighed (Curiosity)、② Ordentlighed (Propriety)、③ Rummelighed (Tolerance)、④ Ansvarlighed (Responsibility) の四つである（表）。

このような価値観を高校に関わるすべての人と共有しているため、対話しやすい環境となっている。生徒に対しては、「大人」として関わり、トラスト（＝信頼）がある分、責任があるというメッセージが送られる。さらに、運営側である責任者にとっても、この価

表 NORA

① Nysgerrighed (Curiosity) : 好奇心。学びの上でとても重要であると位置づけられている。
② Ordentlighed (Propriety) : 誠実に関わること。自分の周りの人との付き合いにおいて、ずるいことをせず、しっかりと向き合うことを意味する。
③ Rummelighed (Tolerance) : 余裕。をもって関わること。自分とは考え方の違う他者（人種、セクシャリティなども含む）と意見が合わなくてもよいが、一緒に居られるということ。違いを認めたくえて関わることのできる余裕を意味する。
④ Ansvarlighed (Responsibility) : 自分と自分の周りの他者に対する責任。学ぼうとする姿勢、授業に関わろうとする姿勢、自分と他者にとって、相応しい態度・環境になっているかに責任を持つこと。

先生は、反対意見を述べる際には、まず相手の言ったことを繰り返して言わなければならぬというルールを課している。そうやって、具体的に何をすべきかを示すことで、生徒たちがどのように行動すべきなのか分かり、心理的に安全な環境が作られていると感じられた。

心理的安全性の確保、デモクラシーは日常的な合意形成プロセス、トラストは基本的な信頼

今回の視察を通して、高校生くらいの若者を一人の大人としてトラスト（＝信頼）しているという周りの大人の徹底した関わり方と、若者たちが社会の一員として活躍できるよう、対話（＝dialog）を通じて、相互理解



高校での訪問の様子

しながら合意に至るプロセスを教育していることがとても印象的であった。これまでも数日間のうちにデモクラシーという言葉に触れたことはなかった。デモクラシーというと、その

価値観を守った行動、振る舞い、教育となっているが、常に問われている。

パートナー学校（国際交流）での学び

訪問した高校には、世界に一五のパートナー学校がある。例えば、先述のアンドレアは、三年生の時にアルゼンチンの学校にホームステイしているが、一、二年生では、自国の文化に加え、アルゼンチンの歴史、スペイン語、経済学などに関する学習を行っている。アルゼンチンの学校から生徒がホームステイに来て交流もしている。

ここでの学習は、将来その国と関わるかどうかを問題にしていない。実際に関わるために学習しているのではなく、異文化と関わること、違う価値観をもつとはどういうことなのかを学んでいる。異文化の人と関わり、時として、自分からは「奇異」に映る。ただし、自分たちも相手から見ると「奇異」かもしれない。そのような他国の人たちに対し、「なぜ、そのような行動を取っているのか」と好奇心を持って考えることが重要である。好きになる必要はないが、いいところも悪いところも理解することが誠実に関わるということなのであろう。

デモクラシーを教えるとは？

デンマークにおいて、学びの二つの目的は、① Career と ② Democratic citizenship である。Career は、いずれは仕事ができるようになるための準備教育である。Democratic citizenship は、社会に関わる人を育てるための教育である。どちらも欠かすことはできず、一人の人間として成り立つためには、自分が

言葉だけで自分とは距離が遠い感覚になってしまいがちだが、デンマークの人たちが実践するデモクラシーは、日常にある。日常的に人と関わる中で合意形成のプロセスがデモクラシーであり、身のまわりのことも、社会に起きている課題も、どちらも重要な社会参加である。自分とは違う意見をもつ人がいるからこそ、きちんと対話しなければならぬ。その対話によって意見を擦り合わせ、人と関わり、社会へ影響を与える、社会に参画する人たちが（これから社会に出る若者）を育成しているのである。

当然ながらデンマークの人たちも最初から意見を言えるわけではなく、意見の作り方を学んでいる。ただし意見を言い合うためには、その集団が心理的に安全な場所であると感じられることが重要である。そのためにNORAのような価値観の共有があり、どのように伝えるのかという具体的なルールによって意見を伝え合う雰囲気醸成していた。

心理的安全性とは、チームは対人リスクをとるのに安全な場所であるという信念がメンバー間で共有された状態と定義されている(Edmondson, 1999)。心理的安全性は、特定の相手に対する信頼の概念とは異なり(Edmondson, 2018)、チームなどの集団が状態として心理的に安全（恥をかく、拒絶される、罰を与えられることはないという信念）を意味する(Edmondson, 1999)。トラスト(Trust) は、一対一の信頼を指す言葉であるが、デンマークというトラスト(Trust) は、あなたも私も大切にされている、されるべき存在であるという、人としての尊敬(respect)を含んだ根源的な信頼のことであると感じら

どのような価値観を持ち、困難をどのように乗り越え、他者とのように関わり、自分にとっての社会の役割が何なのか、自らのアイデンティティを持つための教育を行うことが必要であると考えられている。さらに、社会に関わっていくためには、必ずしもテストといった数字（点数）で表すものが重要ではないという価値観が共有されている。

デモクラシーを教えるとは、他者との関わり方を教えることだという。他者と意見が合わなくても理解しようとする、対話する、話を聴く、関わることであり、新しい世代（つまり子どもや若い世代）に対して教育し続けないといけない。このデモクラシーを教えることは、独裁者をうまいために重要なことであり、幼稚園から一貫した教育観となっている。

アンドレアは、具体的な授業方法について教えてくれた。社会学で、「これが正解」という授業はなかったという。ラウンドテーブル形式で、一〇人から一五人の少人数でディスカッションを行う。テキストを読んでから、「テキストのメインテーマは何だと思いますか？」といった話し合いをする。生徒の一人がファシリテーターを務め、誰がどのように話しているかを記録して、話していない生徒に働きかけたりもする。

つまり、生徒たちは、自分の意見の作り方を学んでいる。何かを伝えようと考えるとき、自分が何を言わなくてはいけないのかに集中しがちだが、他の人が何を言っているのかをきちんと聴いて、それから自分は何を思うのかを組み立てていく。もちろん、デンマークにもシャイな生徒はいる。だからこそ、ある

れた。その根源的な信頼をベースとして、集団になった時にも意見交換ができるような心理的安全性を確保し、意見交換ができるような学習環境となっている。デンマークでは、社会全体がデモクラシー教育の重要性を認識し、子どもたちの成長を支援していくという共通認識がある。はじめから人種や意見も、違う、人がいることを前提として、完全に意見が一致しなくてもよいが、それぞれの意見を理解した上で、一緒に居られる」という大らかさも、安心感につながっているであろう。

最後に、このデンマークの視察を通して振り返ったのは、私たち大人が、高校生を一人の大人として接しているかということである。ツアーの途中、通訳を務めてくれたソールンさんは、「日本語に訳すときに同じ高校生でも、子供たち」と訳してしまう」と話していた。日本には日本の教育の良さがあるとは言え、過保護に、子供扱いしてしまうようなところはないだろうか。若者にどのように接するのか、古い価値観を押し付けてはいないか、大人たちの在りようを問われているようであった。大学生と日頃から関わっている一人の大人として、どのように「居る」のか、改めて考えたい。

参考文献

Edmondson, A. (1999). Psychological safety and learning behavior in work teams. *Administrative Science Quarterly*, 44(2), 350-383.
Edmondson, A. C. (2018). The fearless organization: Creating psychological safety in the workplace for learning, innovation, and growth.